

千刈狸の呟き

今時珍しい媒酌狸なるお役目を引き受けた。このような依頼は突然であるに決まっているので、私の一存では決められない。「家内の了解がなければ」と返事を保留した。早速この話をすると、意外にもあっさり引き受けると言う。それにしても何故、この御時世に媒酌を立てるのかと尋ねると、きちんと形を整えたい、又、これからの人生の後見人としてもお願いしたいとの返事。それならば有難くその役を受けることとした。やがて御両家の顔合せ、披露宴までの日程調整と話は進んでいく。結納を控え全く初めての事にうまく口上を述べられるかどうか、必死であった。当日、ひどく緊張し一番良い背広を着て、結納の場に臨んだ。産むが易し、全ては進行の世話をする方が仕切ってくれた。家内の出番はなく、私の簡単な挨拶のみで会食の席となった。

披露宴の日が1ヶ月後、3週間となるにつれ、狸の頭は挨拶の事でいっぱいになってきた。あと2週間となったところで、媒酌人挨拶の原稿を書き始めた。この頃、狸は躁状態になってきた。

～ 狸の仲人話 ～

媒酌狸

漫談調になったり、講談のようになりたり。

書いては直し、消しては加え、5回目の書き直しになったところで、当日が来た。結局、全文を用意することをあきらめ、当日の朝、躁から醒めた。ギリギリの時刻を過ぎて、会場に着き、モーニングに着替えて、親族の集合写真会場に入ると、既に狸の到着を待っているところであった。挨拶の原稿はレジユメにしかならなかった。御来賓が大勢たむろする中をウロウロ、行ったり来たりし、ようやく迎賓となり、新郎新婦、御両親と並んで、300回以上の御辞儀をした。いよいよ入場である。少しいたづらをし、先導が会場に入場してもしばらくは動かずにいて、先導が異変に気づき、会場が爆笑したところで、入場しようかと考えたがそれはやめておくことにした。さて、新郎新婦、媒酌人が高砂に並び、いよいよ挨拶の始まりである。

初めての、そして二度とはない、かくも御目出度い仲人話のひとつまでございました。